

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

## 日本LD研究会会報

第3号



事務局：長瀬総合療育研究所内 〒164 東京都中野区東中野5-5-10 R.H.S.2F  
TEL & FAX. 03-3360-1855



## LDとの出会い

日本LD研究会副会長  
白百合女子大学教授

森 永 良 子

第一回のLD研究会が四谷の上智大学で開催されたのは、平成4年も残すところ1か月あまりになった11月22、23日の連休でした。この日は天候にも恵まれて、九州から北海道まで多くのLDに関連する職種の方々が集まりました。

第1日のトップバッターを受け持った私は時を追って席が一杯になってくるのを肌で感じていました。

1973年にイリノイ大学（シカゴ）にアメリカのLD研究の草分けの一人であったマイクルバスト博士を所長としてChild Study Centerが開かれました。ここはLDの教師を養成し、LDの臨床を行うセンターでありました。この開設の際にマイクルバスト先生の下でLDについて学ぶことができたのが私とLDの出会いでありました。

それまで日本の病院の小児科で仕事をしてきた私にとって、当時、MBDと呼ばれてきた子ども達がアメリカではすでに教育の対象になっていたのは驚きでした。シカゴでは小児病院をはじめ小児神経のクリニックにLDを専門に扱う科があり

多動、注意集中困難などの子ども達の治療が行われていました。学校にはLDの通級学級があり、子どもを持つ親たちはLDに高い関心を示していました。

しかし、ここまでくるには10年かかったとマイクルバスト先生をはじめ、LDに関係する人々はよくいっておられました。アメリカで初めて親達が集まって大会を開いたのが1963年、シカゴにおいてだったのです。そして、およそ30年を経てLDの大会が日本でも開かれるようになりました。

子どもは健常児と障害児だけではありません。その狭間で悩んでいる子ども達も少なくありません。LDは、それぞれの子ども達の特性が今まで私たちが考えていた以上に複雑であり个性的であることを、教えてくれてもいるのです。こうした子ども達の特性を受け入れてその発達を見守るためにも、親も教師ももう一度、子どもについて考え直さなければならない時期にきているのではないのでしょうか。